

## 季節を越えて届いた、やさしさのしずく

去年の12月29日、冬の冷たい風が吹くディズニーランドのトゥモローランド・テラスは、夢を追うゲストたちでにぎわっていた。私たち家族もその中にいた。かみさん、息子夫婦、そして元気なお兄ちゃんとちいさな妹の孫たちと一緒に。

お兄ちゃんが楽しみにしていたドリンクをようやく手にしたその時、すれ違いざまに他のゲストとぶつかり、ドリンクがこぼれてしまった。ぶつかった人は気づかずに通り過ぎていく。うつむくお兄ちゃん。心配そうに見つめる妹。その様子を、そっと見守っていたキャストさんがいた。

そのキャストさんは静かに近づき、「大丈夫ですよ。こちら、すぐにお作りしますね」と優しく声をかけてくれた。まるで魔法のように、新しいドリンクが手渡され、お兄ちゃんの顔がパッと明るくなった。妹もにつこり笑った。夢の国の魔法って、こういう小さな優しさのことなんだなあと、家族みんなで心があたたかくなった。

そして季節は巡り、8月5日。花笠まつりの初日、真夏の午後。街は踊りの熱気と容赦ない日差しに包まれていた。喉の渇きを癒そうと立ち寄ったセブンイレブンで、アイスコーヒーを買おうとしたときのこと。

マシンから注がれる黒く澄んだ液体が、カップの氷にぶつかって音を立てるのを見ていると、心が少しだけ涼しくなった。カップにコーヒーが注がれ、蓋をしようとしたその瞬間、手元がふっと滑り、カップごと床に落としてしまった。氷とコーヒーが広がる床。自分の不注意に、恥ずかしさと申し訳なさがこみ上げた。

恐る恐る店員さんと呼ぶと、「大丈夫ですよ」と笑顔で応じ、何も言わずに丁寧に床を拭き始めてくれた。そして驚いたことに、新しい氷入りのカップを用意し、再びマシンにセットしてくれたのだ。何も責めず、何も求めず、ただ「どうぞ」と差し出されたその一杯は、冷たさ以上に心を潤してくれた。

あの日のアイスコーヒーは、ただの飲み物じゃなかった。人の優しさが染み込んだ、忘れられない一杯だった。

「職業奉仕」とは、ただ仕事をこなすのではなく、自分の職業を通じて人の役に立とうとする心。つまり、「仕事を通じた思いやり」なのだと思います。

ディズニーのキャストさんは「夢を守るプロフェッショナル」として、悲しそうな子どもに寄り添い、マニュアルを超えた心のサービスを届けてくれました。企業理念として「魔法のような体験を届ける」ことが根づいているからこそ、一人ひとりが自分の判断で最善を尽くせる。その文化と個人の思いやりが重なっ

て、あの瞬間が生まれたのだと思います。

他方、セブンイレブンの店員さんの行動は、「日常の中の思いやり」としての職業奉仕でした。忙しい中でも、床にこぼれたコーヒーを丁寧に拭き、新しいカップを差し出してくれたその姿には、マニュアルだけではなく、人としての優しさがにじんできていました。コンビニという現実的な空間でも、困っている人にそっと手を差し伸べる、その判断は、まさに個人の性根から生まれたものだと感じます。

どちらにも共通していたのは、「相手を思いやり、その人にとっての最善を尽くす」という姿勢。それはまるで、水がそっと乾いた心に染み込むようなやさしさでした。

シェルドンは、「商売のコツはサービス。お客に奉仕し、誰かに尽くしたいと思うことが重要」と言っています。私も、こうした体験を通して、「仕事」とは単なる作業ではなく、人と人をつなぎ、心を動かすものなのだと、改めて実感しました。

私は内装・看板業という私の生業を通じて、職業奉仕の心をどう形にできるかを、日々考えています。地域に喜ばれ、誰かの役に立つ仕事をする。それが、私の生業の根っこにある想いです。

お客さまがどんな気持ちでその空間や看板を作ろうとしているのか、丁寧に耳を傾け、「届けたい想い」を一緒にデザインすること。それが、ただ「作る」だけではない、職業奉仕の第一歩だと感じています。現場では、配線の見え方や看板の角度など、細かな部分にも気を配ります。「ここまでやってくれたんだ」と思ってもらえるような小さな気配りが、信頼や感動につながると信じているからです。看板はお店の「顔」。フォントや色、照明の当て方ひとつにも、「このお店の魅力が伝わるかな？」という視点を忘れずに、心を込めて取り組んでいます。完成の瞬間に「ありがとう」と言ってもらえるように、ただの納品ではなく、心に残る「サービス」を届けたい。

私の生業も、水のように誰かの暮らしにそっと寄り添うもの。看板や空間にも、「見えないけれど、確かにそこにあるやさしさ」が宿ると信じています。